

令和 5 年 6 月 30 日現在

機関番号：37301

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K13070

研究課題名（和文）Self代名詞文断片の直接生成分析

研究課題名（英文）Direct Generation Analysis of Fragments of Self-Pronouns

研究代表者

永次 健人（Nagatsugu, Kento）

長崎総合科学大学・共通教育部門・講師

研究者番号：60779768

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では、self代名詞の文断片について、Jackendoffの三部門並列モデルに基づく枠組みの下、直接生成分析を論じた。Self代名詞の文断片が文断片の削除分析と束縛理論（特に束縛条件A）への反証となり、Reinhart and Reuland (1992) の照応形の分析に基づくと、直接生成分析はself代名詞が文断片となるとlogophorになると正しく予測することを示した。更に、直接生成分析を可能とするためには、三部門並列モデル、特に、意味 - 統語インターフェイスについて見直しが必要であることも示し、当初は予定していなかったが、省略とself代名詞に関する基礎的な研究も行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、生成文法において、省略に対する標準的な分析となっている削除分析への対案である直接生成分析の理論的精緻化を行うことにより直接生成分析の有望性を示すとともに、現在でも定説となっている束縛理論の経験的な限界を文断片という新しい視点から指摘することで、生成文法の新しい理論的転回の可能性を示した。更に、非主流理論である三部門並列モデルによる省略とself代名詞の具体的分析の方法を提示し、このモデルの発展にも寄与した。Self代名詞や省略について、これまで注目されていない知見を広めることで、後々には英語の教育文法の発展にも貢献すると期待される。

研究成果の概要（英文）：In this research project, I investigated sentence fragments of self-pronouns and argue for the direct generation analysis of them, within the framework of Culicover and Jackendoff (2005), which is based on Jackendoff's Parallel Architecture. I argued that fragments of self-pronouns constitute counterevidence against the deletion analysis of sentence fragments as well as Binding Theory, particularly, Condition A. The direct generation analysis is consistent with Reinhart and Reuland's (1992) alternative analysis of anaphor distribution. Given their analysis, the direct generation analysis rightly predicts that self-pronouns are all "logophors" when they are fragments. Furthermore, I claimed that Parallel Architecture, more precisely, its semantics-syntax interface, needs modification so as to be consistent with the direct generation analysis of self-pronouns. The research also included basic investigations of ellipsis and self-pronouns in general, which was not planned at the beginning.

研究分野：英語学

キーワード：生成文法 省略 直接生成分析 self代名詞 束縛理論 三部門並列モデル 意味 統語インターフェイス

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

自然言語で広くみられる省略 (ellipsis) は、生成文法以外の分野では語用論の問題とされ、文法 / 統語論の主要なテーマとしては扱われてこなかったが、生成文法では初期から重要な研究対象とされてきた。生成文法は意味と形式の關係に一般的な説明を与えることを経験的な目標とするため、言語表現として表れている部分と意味解釈に大きなずれが生じる省略は統語 - 意味インターフェイス (Syntax - Semantics Interface) の一般的性質を考察する上で重要である。これまでの研究では VP 削除 (VP-ellipsis) や sluicing を中心に行われ、主流な分析では、省略構文は抽象的なレベルで文と同じ統語構造を持つとされてきた (Ross (1967), Hankamer and Sag (1976), Merchant (2001) 他)。このような削除分析 (Deletion Analysis) は、解釈意味論 (Interpretive Semantics) と呼ばれる統語 - 意味インターフェイスに関する標準的な想定に基づいている。解釈意味論では、言語表現の意味は統語構造に完全に依存するので (Chomsky (1965))、省略構文は、文相当の解釈を持つことから、文相当の統語構造を発音されないレベルで持つことになる。従って、削除分析が妥当かどうかは生成文法の主流理論 (Chomsky (1965, 1981, 1993, 2008, 2013) 他) の妥当性に直接かかわる問題である。

本研究では省略現象の一種である文断片 (sentence fragment) を扱うが、文断片とは (1A) のような簡略応答 (short answer) に代表される単語や小さな句のみで文に相当する意味内容を持つ表現を指す。省略現象一般と同様に、文断片についても、抽象的な統語レベルでは完全な文構造を持ち、削除により派生されるとする分析が主流となってきた (Morgan (1973), Merchant (2004), Nishigauchi (2006) 他)。これに従えば、(1A) は概略 (2a) または (2b) のように派生される。

- (1) Q: Who does John like?
A: Me. (cf. John likes me.)
- (2) a. [TP John likes [NP me]]
b. [CP [NP me]_i [TP John likes t_i]]

しかし、文断片の削除分析には経験的にも理論的にも問題が数多くあることが指摘されており、(1A) のような簡素な言語表現は文よりも単純な構造を持つべきだという直感から、様々な研究者が文断片は文から派生されるのではなく、表層的な構造のまま生成され、文構造を持たないとする分析、すなわち、直接生成分析 (Direct Generation Analysis) を提唱してきた (Yanofsky (1978), Barton (1990), Culicover and Jackendoff (2005), Progovac (2006), 稲田 (2010), Jacobson (2016), Nagatsugu (2019) 他)。直接生成分析では、(1B) の文断片は抽象的な統語レベルにおいても、(3) のように NP としてのみ表示される。

- (3) [NP Me]

しかし、直接生成分析の先行研究では解釈と文法現象への説明が与えられることはほとんどなかった。Progovac (2006) は文断片が時制 (tense) を欠いているという観察から、英語の文断片に主格が生じない事実を説明しているが、これは他の文法現象には拡張できない。Jacobson (2016) は文断片を構文とする立場から文断片の意味と文法性を説明するが、この分析は、結果的には削除分析と同じ経験的予測をしてしまう。このように、文断片の直接生成分析には個別現象の説明を可能にする理論がないという問題がある。

Jackendoff (1990, 1997, 2002 他) は解釈意味論の理論的・経験的問題点を指摘しつつ、三部門並列モデル (Parallel Architecture) というインターフェイス理論を提唱している。三部門並列モデルでは、意味解釈は統語構造に依存せず、意味構造と統語構造は同一でなくても良い。そのため、省略構文は発音されているものに対応する統語構造だけを持つことになる。省略現象の中でも、文断片は表層形式と解釈のずれが大きいため、解釈意味論と三部門並列モデルのどちらのインターフェイス理論が妥当であるかを検証する試金石になりうる (稲田 2010)。

Culicover and Jackendoff (2005) は三部門並列モデルに基づく省略現象、特に、文断片へのアプローチを展開しようとしたが、具体的な提案に欠き、不十分なものと言わざるをえない。文断片に関して言えば、文断片が文相当の解釈を持つことをどう説明するか、文断片での文法現象にどのような説明を与えるか、問いが残されたままであった。

2. 研究の目的

本研究では Nagatsugu (2019) を基盤に、*self* 代名詞の文断片の分析を通して、これらの問いへの答えを与えること目標とする。具体的には、*self* 代名詞の文断片の解釈と文法性、そして、これらにおける文中の *self* 代名詞との違いを、文中と同様の制約とメカニズムにより説明することを目指す。

削除分析は、文断片に文と同様の構造を想定し、その削除には先行文との構造的同一性が条件

になるとするので (Hankamer and Sag (1976))、文断片は先行文と同じ文法性を持つと予測される (Morgan (1973), Merchant (2004)他)。削除分析によるこの予測が間違っていることはこれまでも指摘されてきたが、直接生成分析の下でどのように事実を説明するかはほとんど明らかになってこなかった (Morgan (1989), Progovac (2006), Culicover and Jackendoff (2005) 他)。

本研究では英語の照応形、特に *self* 代名詞を扱う。削除分析は、*self* 代名詞の文断片について、対応する文で非文法的となるものは文断片でも許容されないと予測するが、これは正しくない (Ginzburg and Sag (2000), Nagatsugu (2018)); cf. Merchant (2004))。

(4) Q: Who admires John?

A: Himself.

(5) Q: Who does John think Sue will invite?

A: (?)Himself.

(4) と (5) の文断片を完全な文にすると、それぞれ (6) と (7) となり、非文法的となる。

(6) *Himself admires John.

(7) *John thinks Sue will invite himself.

この事実は、*self* 代名詞の文断片が文から派生されたものではないことを示すが、(6)、(7) の非文法性は束縛条件 A (Binding Condition A) から予測されるので、照応表現に対する標準的なアプローチである束縛理論 (Binding Theory) に対する反例にもなっている。また、直接生成分析の下では、(4A)、(5A) の統語構造は [NP Himself] のみとなり、先行詞を統語構造上に持たないために、やはり、束縛条件 A は非文法的と予測してしまう。

これまでの直接生成分析の研究では、上記の事実が削除分析への反例になることを述べるのみで説明は与えられていなかった。Nagatsugu (2018) は、(4A)、(5A) のような文断片が文法的になることは、Reinhart and Reuland (1993) の項構造に基づく *self* 代名詞の分析から予測されると論じた。Reinhart and Reuland は、束縛理論を棄却した上で、英語の *self* 代名詞は項のときのみ局所領域に先行詞を必要とする reflexive となり、それ以外の場合は logophor になるという一般化を提唱した (cf. Pollard and Sag (1992))。重要なのは、ここでの項は “syntactic predicate” の項であり、“semantic predicate” の項ではないではないことである。Reinhart and Reuland は統語的な述語の定義として、その全ての項が統語的に実現していることを挙げているが、Nagatsugu (2018) は、文断片は意味的には項であったとしても、その述語が統語的に表れていないため、統語的な項とはみなされず、そのため、(4)、(5) のような文断片は、統語的な項ではないために、logophor として認可されると主張した。Logophor は意味上、または、文脈上に指示対象を探すことができるので (Hagege (1974)他)、直接生成分析の想定するように、“Himself” の先行詞が統語構造上に表れていなくても排除されない。

Nagatsugu (2018) は *self* 代名詞の文断片の文法性が直接生成分析の下で予測可能なことを示したが、以下の課題を残している。

Self 代名詞の文断片の文法性について網羅的なデータが提示されていない。*Self* 代名詞の種類 (人称・数)、文断片の文法役割 (ex. 主語 vs. 目的語)、対応する統語的位置 (ex. 主節 vs. 補文) などが違って、事実が正しく予測されるか検証されていない。

Self 代名詞の文断片が logophor として文脈上の要素を先行詞に取るときにどのような語用論的制約があるかが明らかにされていない。

Self 代名詞が文中で照応形 / 再帰形として解釈され、文断片で logophor として解釈されるメカニズムが不明である。直接生成分析では、一般に、文断片にどのように意味解釈を与え、また、どのように文法認可をするのかという理論的問題がある。

3. 研究の方法

本研究では上記の ~ の課題に対して以下のように取り組むこととした。

テーマⅠ. データの拡張

以下の要素を組み合わせ例ごとに束縛条件 A の違反が許されるかを検証する。

- (8) 代名詞の種類: 一人称・二人称・三人称・単数・複数・each other
文法役割: subject, direct object, oblique object
統語的位置: [主節 ... antecedent ... self ...] / [主節 ... self ... antecedent ...] /
[主節 ... self ...] / [主節 ... antecedent ... [補文 ... self ...]] /
[主節 ... self ... [補文 ... antecedent ...]] / [主節 ... [補文 ... self ...]]

テーマⅡ. Self 代名詞と Logophoricity 条件

Logophor が何を先行詞に取れるかには言語差があるが、記述的研究では Speaker > Hearer > Center of Thought > Subject of Perception の含意的階層性に従うとされている (Culy 1994 他)。Self 代名詞の文断片がこの階層性のどの範囲まで指示可能を検証する。また、Kuno (1987) は *self* 代名詞を含む英語の照応表現の意味・語用論的条件を詳細に示しているが、それらが *self* 代名詞の文断片にも適用されるかも検証する。

テーマ . 直接生成分析へのインターフェイスアプローチ

Culicover and Jackendoff (2005) は、三部門並列モデル (Parallel Architecture; Jackendoff (2002) etc.) に基づく新しい省略へのアプローチを提案しているが、このアプローチでは、文断片は意味 統語インターフェイスを介して、直接、文相当の意味構造と結び付けられる。本研究では、このアプローチを *self* 代名詞の文断片に拡張する。三部門並列モデルでは、文法認可は意味 統語インターフェイスで適用される対応規則 (correspondence rules) によりなされ、文断片に見られる文法現象は適切な対応規則を仮定することで説明可能と想定される。束縛現象については、Culicover and Jackendoff (2005) が文中の *self* 代名詞に関する規則を提案しているが、これは上で見た文断片における *self* 代名詞の振る舞いを説明するのには不十分である。文中と文断片、それぞれでの *self* 代名詞の文法性を統一的に説明できる規則を提案する。Reinhart and Reuland (1993) の一般化では「統語的述語 / 統語的項」という概念が肝要であるが、これを三部門並列モデルにおいてどのように定義するのも重要な問題となる。

4 . 研究成果

下記の理由から、当初の計画を変更し、テーマ III から研究を行った。具体的には、Culicover and Jackendoff (2005) など提唱された三部門並列モデルに基づくインターフェイスアプローチを *self* 代名詞の文断片に拡張し、*self* 代名詞が文中で照応形 / 再帰形として解釈され、文断片で logophor として解釈される仕組みの解明を試みた。その足掛かりとして、文断片および省略一般の理論的問題に取り組んだ。本研究が立脚する直接生成成分の対立仮説である削除分析の問題点を指摘し、直接生成分析を補強する議論を提示した。これらの成果は、日本英語学会の学会誌である国際誌 "English Linguistics" に掲載され、また、日本言語学会第 162 回大会でも発表された。

この上で、*self* 代名詞が文中で照応形 / 再帰形として解釈され、文断片で logophor として解釈される仕組みの解明を試みた。*Self* 代名詞が logophor になることを直接生成分析から導いた Nagatsugu (2018) の分析を発展させ、Culicover and Jackendoff の枠組みの下、*self* 代名詞の文断片が logophor として解釈されときのインターフェイスの対応規則を提案し、また、三部門並列モデルについて、従来の表層的な統語構造と意味構造だけでは不十分であり、項構造を扱うレベルが意味 - 統語インターフェイスに必要であることを示唆し、Jackendoff のモデルの見直しの必要性を示した (『日本英文学会九州支部 74 回大会』発表および『本英文学会九州支部第 74 回大会 Proceedings』)。

また、文断片の直接生成分析と *self* 代名詞研究の意義を専門分野外でも広く知ってもらうため、言語学および関連分野の研究者の交流とアウトリーチを目的としたオンラインイベントである『言語学フェス 2022』『言語学フェス 2023』でポスター発表を行った。

研究テーマの II および III については、新型コロナウイルス感染症の流行にともなう社会状況の大きな変化により当初予定した調査が十分に行えなかったこともあり、発表するに値する成果を得ることができなかった。実証的な研究と経験的射程の拡大が今後の課題として残った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 永次 健人	4. 巻 1
2. 論文標題 日本語における疑問文断片の非明示的 WH 疑問解釈 削除分析への反論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本言語学会第162回大会予稿集	6. 最初と最後の頁 193-199
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 永次 健人	4. 巻 1
2. 論文標題 概念構造からの anaphor と logophor への統一のアプローチの試み 文と文断片の self 代名詞	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本英文学会九州支部第74回大会Proceedings	6. 最初と最後の頁 11-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Kento Nagatsugu	4. 巻 37
2. 論文標題 Is Ellipsis Topicalization?	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 English Linguistics	6. 最初と最後の頁 193 - 203
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 永次 健人
2. 発表標題 日本語における疑問文断片の非明示的WH疑問解釈 削除分析への反論
3. 学会等名 日本言語学会第162回
4. 発表年 2021年

1．発表者名 永次 健人
2．発表標題 概念構造からの anaphor と logophor への統一적アプローチの試み 文と文断片の self 代名詞
3．学会等名 日本英文学会九州支部第74回大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 永次 健人
2．発表標題 文断片のすすめ
3．学会等名 言語学フェス2022
4．発表年 2022年

1．発表者名 永次 健人
2．発表標題 英語ってキモチ悪い！ Self形というバケモノ
3．学会等名 言語学フェス2023
4．発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------